

内外の経済界から、その活躍が注目される存在となっていました。そして昭和37年には万世閣の取締役就任、初代社長増次郎さんは会長となりました。

ヨーロッパ

諸国への視察

日本温泉協会の役員であった浜野豊さんは、昭和38年8月13日、日本生産性本部観光視察団の一員として、フィンランド・スウェーデン・ノルウェーの北欧3カ国を視察し、その後私費を投じて西ヨーロッパ7カ国をまわり、さらにアメリカにまで足を伸ばしました。早くから観光産業の国際化を予見し、観光立国を模索していた豊さんにと

って、この海外で得た見聞は大きいものでした。

11カ国に及んだ旅行の中で、最も強く豊さんの心を捉えたのはスイスでした。「欧州見てある記③」(室蘭民報) 中からその一部を抜粋します。

「インターラーケンに出発したが、途中下車したモントルーという有名な観光都市は、ジュネーブで各種国際会議が開かれるため、観光都市になっている。スイスのレマン湖は洞爺湖を大きく感じた感じで、狭くくびれた向い湖岸は中島のように。また両端は珍小島、入江は西湖畔を思わせ、洞爺湖とそっくり。しかも湖岸には散策通り抜け、白鳥・カモ、そのほかの小鳥がたくさん戯れていた。」

学生時代、山岳部のリーダーだった豊さんは、秀麗なアルプス連峰にも魅せられました。

豊さんは、「スイスのレマン湖とは、ぜひ姉妹湖の契りを結び、内外観光の地が手を結んで観光開発に努めなければ……」

(昭和39年7月、箱根町との姉妹都市調印式を報じた室蘭民報コラム「小窓」より) という雄大な未来図を描いて9月20日帰国しました。

箱根町と姉妹都市提携に奔走した浜野 豊さん

昭和39年4月、浜野豊さんは、日本温泉協会の役員会に出席し、旧知の石村喜作箱根町長にスイス旅行の感動を話しました。石村町長は、温泉協会の副会長であり、町長の弟さんは、観光協会の会長を務め、みずから湯本で「ホテル三昧荘」を営っていました。石村家と浜野家は、観光事業を通して万世閣の先代社長増次郎さんの頃からつき合っていました。

旧知の心安さもあって豊さんは、箱根・虹田両町の姉妹都市提携を熱心に説きました。石村町長も豊さんの識見と情熱にうたれ熱心に聞きました。豊さんの話の中には、レマン湖・芦ノ湖・洞爺湖提携の構想もあったのではないのでしょうか。石村町長も姉妹都市提携に賛同しました。

5月20日、万世閣は国際観光ホテル整備法に基づく政府登録を受けました。6月豊さんは、常盤虹田町長、町議会議員代表とともに再び箱根町を訪れ、正式に姉妹都市提携を確認しました。

7月、湖水まつりで賑う洞爺湖畔で「箱根・洞爺湖姉妹観光地提携宣言」の式典が行われました。奔走した浜野豊さんの感慨もまた深いものがあつたでしょう。40年間にわたる箱根町と虹田町の濃密な友情と交流はここから始まりました。

北国の湖畔に

大きな星がおちた

昭和41年3月、万世閣の創業者である初代社長浜野増次郎さん死去の翌年、豊さんは2代目増次郎を襲名しました。襲名後の豊さんは、登別温泉に進出。登別温泉ホテル万世閣を新築。従業員60歳定年制を実施するなど経営の近代化をはかるとともに、虹田町議会副議長、洞爺湖温泉観光協会会長をはじめ多くの公職を歴任し、虹田町、洞爺

湖温泉の発展に尽力しました。豊さんが病気を発見したのは、昭和40年の暮れでした。入院手術後の経過は順調でした。病名は胃がん。シベリア抑留時の辛酸が死期を早めたのかもしれない。

息を引きとる3日前、眠りから覚めた豊さんは「戦争から帰ってきた時と何も変わらないね。洞爺湖はいいなあ」と独り言のようにつぶやいて、また眠りに落ちたと言います。この年(昭和47年)の9月、豊さんは多くの人生を終えました(享年53歳)。豊さんと親交のあつた当時の室蘭民報記者宮田栄一さんは、室蘭民報に掲載した追悼文を「北国の湖畔に大きな星が落ちた」という言葉で結んでいます。

**箱根町・洞爺湖町
姉妹都市提携
50周年記念式典**

●日時
7月26日(土)
10:00~

●会場
洞爺湖文化センター

多くの町民の皆さんの
参加で、50周年を
祝いまひよう!